



看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科附属
看護実践研究指導センター

Center for Education and Research in Nursing Practice,
Graduate School of Nursing, Chiba University

看護実践研究指導センター平成25年度講演会

—看護系大学における大学院教育のFDを考える—



平成25年6月29日(土)、千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターの講演会「看護系大学における大学院教育のFDを考える」を千葉大学けやき会館で開催しました。当日は、全国各地から116名の参加があり、盛会のうちに終えることができました。

講演会に先立ち、宮崎美砂子研究科長より挨拶がありました。今日の看護系大学が学部で210校、大学院

(修士課程)で140校を超えたことで、大学院の教育の質を高めるための議論がなされるようになってきていること、グローバル化・学際化にも焦点を当て、学部のFDとともに大学院のFDについて取り上げた経緯が説明されました。講演は、センターの野地有子教授の座長のもと、国際交流協定校の米国サンディエゴ大学から、DNP教育についてSusan L. Instone博士、PhD教育についてCynthia D. Connelly博士をお迎えし、講演後のオープンセッションでは、DNP教育とPhD教育の相違と相互協力により、大学院教育の質を高める具体的効果などについて、活発な質疑応答がなされました。続いて、国立教育政策研究所の川島啓二部長の座長により、名古屋大学の近田政博 博士から研究室運営について、わが国の現状と課題をご講演いただきました。

講演会後は、けやき会館レストラン「コルザ」でなごやかに交流会が行われました。

センター研究会

平成25年6月28日(金)、センター講演会の講師としてサンディエゴ大学からお招きしたInstone博士、Connelly博士を講師に、センター研究会を開催しました。センター教員の他、学内の大学院生など計10名の参加がありました。研究会のテーマは、「IOM Report: The Future of Nursing」とし、IOM Reportを受けて国内で展開されているキャンペーンのその後の動向と、DNP教育およびPhD教育におけるIOM Reportの影響について、最新情報を伺いながら本研究科での取り組みについて示唆を得ることを目的に企画しました。研究会では、昨年のAnn Mayo博士のプレゼンテーション内容を共有した後に、討議を行いました。討議では、国民の医療ニーズに応えるために看護職のリーダーシップの発揮や役割拡大が求められている一方で、様々な障壁によって役割拡大が進まない現状が紹介され、そのような

状況の中で、看護職がどのように取り組んでいく必要があるのかについて、教育・実践・研究それぞれの観点から活発な意見交換がなされました。

看護職が持っている知識や技術などの能力は、まだ十分に社会に還元されていないという視点から、DNP教育では特にリーダーシップやプロジェクト・マネジメントに重点が置かれていることなどが紹介されました。研究会を通して、センターが現在取り組んでいるプロジェクトの意義を改めて確認するとともに、参加者それぞれの関心に応じて貴重な学びを得ることができました。



講演 1

米国における大学院教育—DNPコース—

Developing DNP Faculty: Opportunities and Challenges



Susan L. Instone博士

Susan L. Instone博士からは、米国における大学院教育について、ご自身がサンディエゴ大学の Doctor of Nursing Practice (以下DNP) コースの教授であり責任者であることから、DNPの特にFDに焦点を当てた講演をしていただきました。

前半はアメリカでどのようにしてDNPの制度を確立していったのか、DNPの歴史についてご説明下さいました。アメリカでは、非常に重要な組織として Institute of Medicine (以下IOM) があります。2003年IOMから、アメリカにおけるヘルスケアシステムの改善についての提言が出ました。IOMは特に教育に注目をし、看護師を含む医療従事者の教育の質向上を提唱しました。また、2010年の報告書では、ヘルスケアの場において看護実践をさらに推進することの必要性、看護師の教育レベルの向上、看護師がヘルスケアのチームリーダーの役割を担う等を推奨しています。一方で、2004年に全米看護大学協議会 (American Association of Colleges of Nursing, 以下ACCN) では、看護師の臨床実践に関する教育をドクターのレベルまで引き上げることが必要であると討議されました。看護学においてこれをどのようなプログラムにすべきか、またその学位をどう呼ぶのかが検討され、その結果、2006年にDNPと名付けられたプログラムの基本要素が出されました。サンディエゴ大学では、これらの要素に基づいてDNPプログラムアウトカムという形で実際のプログラムを開発し、2008年からDNPコースを開始し、以降、現在まで59名の学生が卒業し、68名が在学中とのことでした。

次にInstone博士は、DNPが実践系で臨床に特化した学位であること、さらにこの新しい学位を開発するにあたり、複雑な状況を理解しアセスメントする

ことや学生や教員にとってどのような準備が必要でどのように実践していくのか、総合的に捉えるためのフレームワークとしてインテグラルセオリーを用いたことを説明して下さいました。インテグラルセオリーは個人の内面、個人の外面（他者から見た行動）、集団の内面（組織の文化や関係性）、集団の外面（環境や社会システム）の4つの視点から考察します。例として、ファカルティに必要とされる専門知識においては、それぞれ、ナースングセオリー、リーダーシップスキル、臨床経験、保健政策が必要となってきます。これは教員がどのような専門知識で教育をサポートすることができるのかということを示すものです。インテグラルセオリーを用いることで、ファカルティにはどのような知識が必要なのか、また、学生にはどのような知識が必要なのか、ということを明確にすることができます。

ACCNのDNPタスクフォースのなかで、DNPコースの教員は教員として教えるだけでなく、自らの研究活動及び、実際の臨床の場で患者さんを見て、そこに学生も同席する、ということが謳われています。DNP教員としての基準やDNPプログラムをどのように評価していくのか、学生の入学基準はどうするのか、また患者ケアの評価はどうするのか等々に対してインテグラルセオリーは役立ちました。インテグラルセオリーを用いて、教員や学生の感情や考え方、教員としての期待される能力、信頼関係や文化、看護実践のための環境やシステムの4つの視点から考えることで、カリキュラムマップという形で具体例を挙げ、実際にサンディエゴ大学の具体的なカリキュラムについて、教員を育成しながら新しいDNPプログラムのシステムを作ることをお話し下さいました。



オープンセッション

講演2

米国における大学院教育—PhDコース—

Educating the Next Generation of Nurse Scientists



Cynthia D. Connelly博士

Cynthia D. Connelly博士は、PhDとはどのような学位であるのか、またナースサイエンティストを育成し発展させるにはどのようなプログラムが必要かについてご講演くださいました。

PhDは、教育レベルとしては最高位であり、確固とした強力な科学的視点を持ち、その修得が期待されています。PhDの学位をとることは、幅広く、深く知識を探究することです。PhD取得者は看護実践の中で、特に保健・医療の格差を減らし、健康増進を推進することが期待されています。その一方で、ベストサイエンスには他の学問領域とのコラボレーションも重要となります。他の学問領域とどのような違いがあったにしてもその橋渡しをするのが看護師でありナースサイエンティストなのです。

ナースサイエンティストの教育には様々なプログラムがありますがPhD教育を受けるだけではサイエンティストになることはできません。実際に患者を巻き込み基本的なことは1対1で教える、学際的なディスカッションの機会を与える、学生に自らのキャリアを考えさせその実現のための環境を作る、PhDがリサーチの学位であることを学生、教員とも理解する、などが必要となります。

また、PhDプログラムは研究活動のみでは不十分です。学生の学術的・財政的ニーズに応え、また大学や学部を超えた構造的・包括的な環境づくりが必要となります。環境ニーズとして研究や運営に関する専門知識があげられますが、学生はこの知識を持っていないことがほとんどです。彼らをサポートしなければなりません、この知識は教員のだれもが網羅的に持っているものではありません。学生に新しい知識を獲得する機会を与えるには十分な数の教員が必要となります。看護学部に留まらず、横断的に

サポートを提供し合う必要があるのです。

一方でファカルティには、各専門領域の知識に加え、研究者としての活動模範、チームサイエンスの遂行、メンターシップ、グローバルな観点、グローバルなコミュニケーション、等の能力が求められます。看護師はグローバルなヘルスケアに貢献することができます。看護は世界に目を向け、ヘルスケアに何が求められているのか、相手が何を考えているのかを理解しなければなりません。こういったヘルスケアリサーチで重要なのは「知識を作る」そして「知識を実践に移す」ことです。そのため研究と実践を合わせることが必要であり、そして、国際的な理解を深め新たな知見を発見するためにも、グローバル・リサーチ・チームのような交流プログラムが重要となるのです。

オープンセッション

Instone博士、Cynthia博士の講演後、両博士にご登壇頂き、野地教授進行のもとオープンセッションを行いました。

オープンセッションでは、参加者の皆様から多くのご質問をお寄せいただきました。その中には、DNPの教員には多くの能力が求められるが、各領域の教授が協力して教えているのか、教員個々がその力を身に着けているのか、またDNPコース設置時、DNPの教育ができる教員をPhDコースで養成しているのか、という質問がありました。Instone博士は、ご自身がPhDの学位をとってからDNPの教育を始めたこと、様々な分野の人材を募りコースを用意したことを述べられました。またConnelly博士は、DNPとPhDは教育の視点が違い、それが理解されないとこに問題があること、さらにDNPのFDには、リサーチベースの様相から抜け出し、エビデンスベースの実践に変える必要があることを加えました。

また、DNPとPhDで求められることの違いについての質問では、Instone博士は、PhDは新しい知識を創ることに注目をしており、一方DNPは十分な知識が創られ、複数のリサーチプロジェクトを推進するだけの知識が蓄積された後に、その知識、情報をもってそれを実践する、そのため、結果としてPhDがリサーチのエビデンス作りをし、DNPがそのエビデンスを臨床へと橋渡しをするという流れになると説明されました。その他にも、多くの質問が寄せられ活発な意見交換が行われました。

講演3

大学院における研究室教育の課題と展望



近田 政博 博士

名古屋大学高等教育研究センターおよび大学院教育発達科学研究科の近田 政博 博士より日本の大学院教育の現状についてご講演いただきました。まず、日本の研究室教育が現在過渡期にあることによる研究室教育の難しさについて言及されました。近年研究室教育は他大学出身者、外国人留学生、社会人学生が増え、多様化・大衆化しつつある一方、教員の多くは伝統的な研究室教育である徒弟制度のような

閉鎖的な環境で育ってきました。現在の研究室教育は従来の方法で育った教員が新しい状況に直面しながら試行錯誤しなければならない状況にあります。そのような中、研究室教育が直面する様々な課題として、就職が不安定であり学生に大学院進学を勧められない、学生の基礎学力の低下、日本語リテラシーの不足、社会的スキルの不足などが挙げられました。今の大学院生は必ずしも研究者にならないという現状を踏まえ、研究能力だけではなくコミュニケーション能力、社会常識、礼儀作法なども研究室教育で担保していく必要があること、また、多様化した研究室教育に対応するには、他大学出身者、外国人留学生、社会人学生それぞれの抱える特徴、問題に合わせた個別指導が必要であることを提案されました。最後に、教員は自分たちが受けてきた大学院教育の既成概念を変えなければならない、それは困難であり挑戦であるかもしれないが、今、必要とされていることである、と力強く述べられました。

看護実践研究指導センターの活動と今後の予定

●「看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進」プロジェクト

平成25年3月「看護学教育におけるFDマザーマップ（試行版）」が完成しました。FDマザーマップを全国の看護系大学に周知し広く活用して頂けるよう、8月の日本看護研究学会と、9月の千葉看護学会で紹介させて頂きました。また今後は12月の日本看護科学学会でも発表する予定です。本センターはFDマザーマップをより洗練させるため、一緒に取り組んで頂けるモデル校を募集しています。

認定看護師教育課程（乳がん看護）紹介



阿部恭子特任准教授

平成25年4月、乳がん看護認定看護師教育課程に阿部恭子特任准教授が着任しました。当教育課程は、平成17年、千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センターに、我が国最初の乳がん看護認定看護師の教育機関として設置され、9年目を迎えました。今年度の認定看護師認定審査では、26名全員が合格し、全国で活躍する乳がん看護認定看護師の総数は213名となりました。

今年は、11月9日（土）に、乳がん看護認定看護師資格取得を希望する看護師および医療機関の方々を対象に、認定看護師教育課程説明会を開催いたします。内容は、当教育課程の概要や教育支援体制の紹介、研修生や乳がん看護認定看護師のメッセージ、個別相談などです。皆様のご参加をお待ちしています。

看護学教育研究共同利用拠点

発行

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

〒260-8672 千葉県千葉市中央区亥鼻1-8-1

TEL : 043-226-2377・2378(看護学部事務部)

URL : <http://www.n.chiba-u.jp/center/>E-mail : nursing-practice@office.chiba-u.jp